

国文学研究資料館蔵『光源氏系図』 解題・注解 加藤昌嘉 久保木秀夫 2

国文学研究資料館蔵『光源氏系図』 翻刻 加藤昌嘉 古田正幸 11

源氏物語古系図のなかの「巢守」 加藤昌嘉 17

『光源氏物語抄』 編者考 金沢実時説の検討を中心に 栗山元子 35

後堀河院時代の王朝文化 天福元年物語絵を中心に 田淵句美子 55

「プリンス・トクガワ」の 生母万里小路睦子の擬古物語書写活動について 中島正二 79

79

特集 2 室町期古典学の可能性

『源氏物語』 ほどのように注釈されたか

——『花鳥余情』の力学—— 前田雅之 92

花屋玉栄と「ちやあ」

——伝秀吉筆『源氏物語のおこり』から——

新美哲彦 120

『弄花抄』の注釈者たち

——肖柏・美隆による後注をめぐる—— 横溝 博 143

『源氏物語』と有職学

——一条兼良から冬良、そして近世へ—— 小川陽子 161

巻頭言……………iv
執筆者紹介……………225
あとがき……………224

『枕草子』 堺本と前田家本の本文

——随想群の本文異同をめぐる—— 山中悠希 178

古注釈の示唆する『源氏物語』の和歌的表現

——式部卿宮の大北の方による「ののしり」の言葉をめぐる—— 陣野英則 199

名所「虫明」をめぐる『狭衣物語』受容歌

江草弥由起 215

国文学研究資料館蔵『光源氏系図』 解題・注解

加藤 昌嘉
久保 木秀夫

国文学研究資料館蔵『光源氏系図』は、いわゆる源氏物語古系図の一つである¹⁾。これまで知られていなかった新出の写本で、二〇〇七年に国文学研究資料館の所蔵となった。以下、解題と注解を試みる。

1 『光源氏系図』書誌

【書写年代】鎌倉末期～南北朝期か。 【寸法】三四・〇×五二・一cm。紙継ぎ二一紙。 【装訂】卷子本(裏打ちあり)
【巻数】一軸 【表紙】茶色地花紋銀欄の後補表紙。左端に八双(発装)あり。紐はさらに後補。 【見返し】金銀箔砂子散らし 【外題】題簽に「光源氏系図」と墨書。本文とは別筆。 【内題】ナシ 【序文】ナシ 【奥書】ナシ 【料紙】楮紙。墨流し。界線あり(二〇・九cm間隔)。 【箱】桐箱入り。蓋貼り紙に「十五」「光源氏系図」と墨書。蓋裏書きはナシ。 【付属文書】「外題古筆在」と墨書された包み紙に、極め札が二点。①「二條家源氏系図」一卷(守村印)「二・三×一・八cm」②「源氏物語系図二條家為氏卿」(牛庵印)「一七・一×二・五cm」

▼表紙・外題について

題簽は、或る時点で付されていた後補表紙の外題を切り取って題簽としたものと考えられる。題簽の左端に、縦の折り線がある。八双の痕であろうか。あるいは、冊子本の表紙にそのまま施されることのある押し八双か。本書の本文料紙には等間隔の折り目が存在しており、或る時期に折本に改装されていた可能性がある(後述)。とすると、現在の外題はその段階での表紙を再利用したものであると見ることもできよう。

▼紙継ぎについて

現状は、紙継ぎ二一紙。各紙の寸法は、以下のとおりである。

- (1) 四八・一cm、(2) 五・四cm、(3) 四八・八cm、(4) 五・七cm、(5) 四八・九cm、(6) 八・一cm、(7) 四六・九cm、(8) 六・八cm、(9) 四七・〇cm、(10) 六・三cm、(11) 二四・五cm、(12) 二三・七cm、(13) 一一・六cm、(14) 二六・五cm、(15) 一五・五cm、(16) 一四・〇cm、(17) 四〇・二cm、(18) 一六・九cm、(19) 三七・二cm、(20) 一六・九cm、(21) 二〇・〇cm、(軸巻紙) 二cm。

紙背には、番号が記されている。以下のとおり、A・B・Cの三種を認め得る。

A 料紙の継ぎ目の中央

- (1)と(2)の間に「一」、(3)と(4)の間に「二」、(5)と(6)の間に「三」、(7)と(8)の間に「四」、(9)と(10)の間に「五」、(12)と(13)の間に「六」、(15)と(16)の間に「七」、(17)と(18)の間に「八」、(19)と(20)の間に「九」。

これは、料紙の墨流しの途切れ目と一致している。従って、この番号の付されている箇所が本来の紙継ぎ位置だったと知られる。ということは、本来は、紙継ぎ一〇紙だったことになる。具体的には次のごとくである。

- (1) が第一紙(四八・一cm)、(2) + (3) が第二紙(五四・二cm)、(4) + (5) が第三紙(五四・六cm)、(6) + (7) が第四紙(五五・〇cm)、(8) + (9) が第五紙(五三・八cm)、(10) + (11) + (12) が